

チャン暦年から見る四川省茂県における 少数民族無形文化遺産の震災復興



大阪大学 人間科学研究科 博士後期課程 王藝璇

1. はじめに

2008年5月12日に中国四川省汶川を震源地とするマグニチュード8.0の巨大地震が発生した。被災者の中でチャン族人口の10%に相当する2万人以上が被災した。この地震ではチャン族の文化传承人や研究者らも数多く被災した。このことによって、チャン族では生活や文化の伝承において困難が生じる環境に直面している。その中、チャン族の伝統祭りである「チャン暦年」も同じような状況に直面している。震災後、中国政府は被災地における復旧、復興のためのインフラ整備と文化の保護に対して様々な支援策を実行した。その中で、チャン暦年などの無形文化遺産に対する復興策は、主に観光開発である。

本論は、現地での観察調査と住民を対象とする半構造化インタビューを通じて、政策側の視点だけではなく、地域社会側の視点から無形文化遺産の保護と復興の過程を調査し(第4~6章)、復興の問題点を解明した(第7~8章)。

2. 四川大地震とチャン暦年

(1) 四川省の概況

四川省は、中華人民共和国西南部に位置する省であり、人口は約8400万人である。その中で、彝族、チベット族、チャン族などの少数民族は四川省の総人口において6.2%を占めており、その人口は490万人を上回っている。このことから、四川省は「中国第二チベット居住区」、「中国唯一チャン族居住区」とも呼ばれる。四川省には豊富な文化遺産がある。四川省三星堆遺跡で発見された「太陽神鳥」は中国文化遺産のシンボルとなっている。

しかし、四川省は地震が多発する地域としても知られている。20世紀以降に四川省ではマグニチュード5

以上の地震が174回発生し、合計20万人以上の死傷をもたらした。近年では2008年の四川大地震のほか、2013年4月20日に雅安市芦山県で起こったマグニチュード7.0の四川地震(「雅安地震」とも呼ばれる)と2017年8月8日にアバ・チベット族チャン族自治州九寨溝県で発生したマグニチュード7.0の九寨溝地震が四川省において大きな人的・経済的損失をもたらした。

(2) チャン族のチャン暦年

チャン(羌)族は、中華人民共和国の少数民族のひとつで人口は約30.9万人である。チャン族の人々が暮らしている地域は、成都平原から青藏高原につながる山間部であり、チャン族の村落のほとんどが山間の峠に建てられている。雨の多い四川省では、チャン族が暮らしている村落の山谷には常に雲が立ち上り、そのことからチャン族は「雲上の民族」と呼ばれるようになった。チャン族の話すチャン語には文字がない。それゆえに、チャン族の文化は口頭で伝えられてきた。チャン族は古代から受け継がれてきた原始宗教である精霊・多神崇拜(アニミズム)を信仰している。チャン族の宗教で欠かせないのがシビ(巫師)である。古代においてシビはチャン族集落におけるリーダーであり、チャン族の社会生活で重要な地位を占め、人々の精神上的な指導者というべき存在であった。

チャン暦年はチャン族伝統の新年で、最も盛大に行われる祭事である。目的は、収穫後に神と祖先に感謝し、「還願」を行い、一家団欒をすることである。期日は、農歴の10月1日であるが、地域によって異なる場合もある(北川は冬至、汶川チャン族自治州は8月1日)。一般的に3~5日間で行われ、7~8日間の地域もある。活動は、一家団欒と山神に対する収穫謝の2つに大別される(松岡 2016)。前者は初日に一家

で宴会（「収成酒」）を行い、第2日目からは一族が互いに招き合う。後者は、シビ祖先や神を祀り、五穀豊穡や人畜繁栄を願う。

（3）四川大地震後チャン暦年などの無形文化遺産に対する保護、復興策

2008年5月12日14時28分に、中国四川省汶川県を震源地とするマグニチュード8.0の地震が発生した。この地震では、チャン族住民が数多く被災し、文化伝承人や研究者らも数多く被災したといわれている。特に、これまでのチャン族の文化伝承はすべて口頭で伝えられてきており、今回の地震で死亡したチャン族人の中には、チャン族語に精通し、チャン暦年などの伝承に詳しい高齢者（シビなど）も多く含まれていた。さらに、チャン族を取り巻く環境への被害も甚大であった。チャン族の独特な羌寨¹などは、山谷という自然環境に合わせて作り上げた建築である。しかし、地震により多くの羌寨が壊滅的な被害を受け、集落の自然環境も大きく変化したため多くのチャン族が移住を余儀無くされた。チャン暦年における重要な地点「神樹林」は数多く被災した。以上のことから、四川大地震はチャン族住民、物質文化、生活環境、精神状態などに大きな被害を与えた。加えて、伝統的なコミュニティを分裂させ、伝統的な文化圏が崩壊した（李ら 2009）。その結果、チャン暦年も厳しい状況に置かれてしまった。

中国政府は被災地における復旧、復興のためのインフラ整備のほか、文化の保護に対して様々な支援策を実行した。復興政策の実施、特に文化復興政策の実施に伴い、チャン族無形文化遺産の保護は広く注目された。「チャン族無形文化遺産保護条例」（2008）、《蔵羌彝文化産業回廊総合計画》（2014）などのチャン族文化保護向けの法整備が提案された。

復興の過程において、チャン暦年は伝統チャン族文化の中で最も重要な祭礼のひとつとして注目を浴びた。2008年6月、チャン暦年は「中国国家非物質文化遺産」として認証された。災害復興という政治的要因がこの認定に大きく働いたことは疑いがなくとも

言われる（松岡 2016）。チャン暦年は文化観光の重要な資源となって、震災復興において、チャン暦年などの無形文化遺産と関連する復興策は主に観光開発である。現地政府によって組織され、チャン族住民、観光客などが共に参加し、開発規模は急速に拡大している。

以上から明らかなように、震災後、チャン族文化の保護や復興も広く注目され、チャン族文化の保護と復興に取り組んでいる。その中で、チャン暦年は観光資源としても重要であると注目を集めるようになった。そこで、観光開発を中心とする復興策はチャン暦年にもどのような影響を与えたのか、現地住民は復興策やチャン暦年の変化にもどのような態度を持つのか、といった点は検討すべき課題であると考えられる。

3. 震災と無形文化遺産

（1）無形文化遺産の定義と特徴

現在、学界で広く受け入れられる無形文化遺産の定義はユネスコが2003年10月17日に可決した「無形文化遺産の保護に関する条約」（以下、2003条約と呼ぶ）の定義である。この条約によると、無形文化遺産の定義は次のように述べられている。

「無形文化遺産」とは、慣習、描写、表現、知識及び技術並びにそれらに関連する器具、物品、加工品及び文化的空間であって、社会、集団及び場合によっては個人が自己の文化遺産の一部として認めるものをいう。無形文化遺産は、世代から世代へと伝承され、社会及び集団が自己の環境、自然との相互作用及び歴史に対応して絶えず再現し、かつ、当該社会及び集団に同一性及び継続性の認識を与えることにより、文化の多様性及び人類の創造性に対する尊重を助長するものである。

定義からもわかるように、無形文化遺産は人、モノ、時、場など、様々な要素が有機的に結びつくことで形作られる（今石 2018）。つまり、伝承人、器具、歳時、場所などの要素は全部欠かせないのである。これらの定義から、地域のアイデンティティとの繋がり、時間

と空間の変化に伴う変化という二つの点は、無形文化遺産にとって最も重要な特徴なのが見える。

(2) 無形文化遺産と地域の繋がり

上記からもみられるように、無形文化遺産の最も重要な特徴は、地域との緊密なつながりと地域のアイデンティティ、あるいは同一性を代表することである。地域の文化というのは、文化の継承はもちろん、宗教施設といったハード面の維持・存続だけでなく、ソフト面での祭りや伝統行事、住民同士の助け合いによる生活行事や共通の文化行事といった住民活動も含む。このような活動の過程において、住民相互の連帯感・共同体意識が作り出された。このような共同体意識はまた一方でチャン暦年の活動を維持し続けている。すなわち、地域文化実態--イメージ--アイデンティティと一連の因果関係がある（中川 2012）。

無形文化遺産は、ある地域の精神的なシンボルであり、地域のアイデンティティを象徴しているため、無形文化遺産は日常生活では意識されない「当たり前の存在」と見られる。しかし、震災など地域社会が壊滅的な被災を受けた時、普段は当然の存在であった無形文化遺産は、地域の共同体意識を再構築する役割を果たしている（清水 2011）。人ともとのそれらから想起される物語を通して、地域社会が新たな関係性を構築し、生活世界を組み直し可能性を探求する（小谷 2018）。無形文化遺産の誕生は、特定の地域環境と不可分であり、さらに地域住民とも不可分である。地域住民との繋がりは無形文化遺産が存続できるかどうかの規定要因である（李 2014）。無形文化遺産の持ち主としての地域住民が、無形文化遺産の保護と復興に対してどのような態度を持つかは、無形文化遺産の保護が成功するかどうかを評価する重要な基準である。地域住民の意向や視点から離れて、無形文化遺産を保護してしまうとすれば、無形文化遺産の基準である地域住民と一体の形を失ってしまうことになってしまう。

また、先行研究の多くは、観光開発などの震災復興策の実施過程において、政府の影響力が大きく、現地

住民の参加が不足していることを指摘している。今石（2018）によれば、これまで、民俗芸能などの無形文化遺産への関心は行政や研究者、一部の愛好者に限られたが、復興とともに被災地も徐々に有名になり、マスコミや観光客なども訪れるようになる。それに応じて、芸術、音楽活動やツーリズムなど様々な領域とコラボレーションした新しい活動も出現する。彼は、観光業によって果たした復興は「外からの力」であり、その力なしには維持できなくなった無形文化遺産も今や少なくないことを指摘している。

(3) 変化している性格、変化している意義

Bourdieu の「文化的再生産」理論によると、文化は静的ではなく、動的な状態であり、持続的な変化や創造を遂げることである。Jigyasu (2001) が指摘したように、文化遺産は「単なる静的なものではなく、非常に動的な、その地域の社会的、経済的、文化的パターンと内在的に結びついた連続的なプロセスの結果である。」日高 (2015) は、「地域が再生された時、或いは新しく生まれ変わることになった時、無形文化遺産は、新しい生活文化を作るヒントになるのではないかと思います」と指摘した。つまり、無形文化遺産自身の持つ意義は絶えず変化していく。それゆえに、無形文化遺産の保護を検討するときに、動的な視点が必要である。また、短期間で復興するものではなく、長期的で持続可能な保護が求められる（高倉 2014）。

4. 現地調査の概要

(1) 調査地：茂県の概要

茂県は中国四川省アバチベット族チャン族自治州東南部に位置する県である（図 1 参照）。2019 年時点で茂県の人口は 11 万人であったが、そのうちチャン族は 88.92% を占めており、中国においてチャン族が最も集中している県となっている（茂県政府ホームページより）。また、茂県はチャン族無形文化遺産の中心地ともいえ、震災後、茂県は古羌城、茂県羌族博物館などのチャン族無形文化遺産保護施設、活動が最も集中している地域である。



図1 茂県の位置

四川大地震により、茂県は壊滅的な被害を受け、四川大地震後に超重度被災区に指定された。茂県の農家などの倒壊率は70%~80%に達し、80%の農家は居住が困難になり、死者3933人となった（日中経済協会2010）。

（2）調査方法

本研究は観察調査と半構造化インタビューを用いた。観察調査については、2020年度チャン暦年のビデオ資料を元に、インターネットの情報など合わせて、チャン暦年の実態を観察した上で分析を行うことでチャン暦年の変化を把握した。半構造化インタビューについては、2019年夏に短期間の予備調査とオンライン調査を行なって、チャン暦年が地域社会に対する意義の変化、現地住民のチャン暦年の保護に対する態度を考察した。調査結果は次の節で紹介する。

5. 2020年チャン暦年についての観察

2020年11月15日、茂県のチャン暦年は古羌城²で行われた。今年のチャン暦年の主題は「全面小康 非遺同行（全面小康³を実現する、非物質文化遺産を保護する）」である。主題からもわかるように、今回のチャン暦年活動の中心は共産党の指導と今の生活を賛美することである。イベントは全部で三つのテーマに分けられている。「祭天還愿祈平安（山と天を祭り、平安無事を祈る）」、「羌風羌韵慶丰收（豊作を慶祝する）」と最後の、「同心聚力奔小康（全面小康を実現するために努力する）」である。活動に参加する人は各人の役目によって具体的に以下のように分けられる。

第一部は、現地の村民（チャン暦年の活動に参加する主体）である。第二部は、茂県、アバチャン族自治州、成都市などの政府機関からの指導者、ゲストなどである。第三部は、司会者、出演者（主に地方から招いた俳優のことで、現地の村からの出演者は含まれない）、他の舞台に関する係員などである。第四部は、観光客、記者、調査員、隣の村の村民、本村の村民の親戚や友人などである。

チャン暦年の最初のイベント「祭天還愿祈平安」が8時ごろに始まった。この一環として主にチャン族の伝統的な祭山儀式の残存項目が展示された。最初の儀式は古羌城の開門式である。チャン族の伝統的な鐘の音と音楽に伴い、チャン族の衣装を着た出演者は両手で赤いハダ⁴を持ち、左右の二列に並んで、ゆっくりと階段に沿ってチャン族の城門に向かっていった。民族の団結を頌する歌とともに、出演者全員が一斉に大声でチャン語の言葉を発した。司会者は「これは国家の団結と世界の平和を祈る意味です」と解説した。その後、猿の皮の帽子をかぶり、羊の皮の鼓を持った釈比は古羌城の門から出てきて、階段を下りながら、祈りを捧げた。



図2 階段から降りるシビ

その後、出演者全員が階段を降りて、鍋荘広場を取り囲んで、薩朗踊りを踊った。チャン暦年の活動も第二部「羌風羌韵慶丰收」に入った。この第二部は三つのチャン族の伝統的な歌舞であり、大部分の出演者は若い女性である。踊りが終わると、2人のチャン族出身の歌手がチャン族民族歌の何曲かを演出した。この

部分の演出の主な内容は、豊作の喜びとチャン族の村の美しい風景をたたえることである。



図3 歌舞

歌舞演出の後は最後の一部「同心聚力奔小康」である。この部分は主に詩の朗読と現代の歌から構成されている。主な内容は共産党の指導の下で、茂県の経済や社会状況はますます良くなって来たことを賛美する。最後に、司会者は将来を展望し、政府の指導の下でチャン族の非物質文化遺産保護と観光の発展はきっと一層向上すると宣言した。ここまでで、チャン暦年の歌舞演出は終わった。

昼ごろ、鍋庄広場でチャン暦年の壩壩宴が開かれた。壩壩宴は「千人鍋」ともいわれ、チャン族の伝統飲食文化でもっとも特色がある宴会ともいえる。食事中、チャン族の若い男女たちは楽しい祝酒歌を歌っていた。夜6時ごろ、鍋庄広場で、キャンプファイヤーがもう一度行われた。

2020年チャン暦年の実態によると、参加者は多く、特に、地震により、元来は有名な地域であるとは言えない茂県が注目され、観光客も多く訪れるようになった。政府の援助により、規模は大きく、内容も充実している。しかし、観光の発展、政府の関与により、チャン暦年の伝統的な意味が薄まり、チャン暦年の内容、参加人員などは大きく変貌し、経済や政治のための祝日となる傾向も窺える。次節では、インタビューの内容を分析して、現地住民の視点からこれらの変化の影響と意義を述べる。

6. 半構造化インタビュー

(1) 調査対象

調査対象者選定の基準は以下のものである。20代から50代まで、茂県におけるそれぞれの年齢層から2～3名を選ぶ。男女の数のバランスにも配慮する。チャン族文化保護に関するスタッフ、自営業、観光業などの職業から2～3名ずつ選定する。選定方法は協力者からさらに協力者の紹介依頼を行うスノーボールサンプリング法である。調査対象者の具体的な属性は表1の通りである。

表1 調査対象者の属性

名前	年齢層	性別	民族	仕事
A	50代	男性	チャン族	タクシー運転手
B	50代	女性	チャン族	茂県古羌城スタッフ
C	40代	男性	チャン族	チャン族医薬無形文化遺産継承者
D	40代	男性	チャン族	自営業（農家楽 ⁵⁾ ）
E	30代	男性	チャン族	自営業（農家楽）
F	40代	男性	チャン族	茂県無形文化遺産伝承センタースタッフ
G	20代	女性	チャン族	茂県博物館ガイド

(2) 調査結果

半構造化インタビューにおいては、チャン暦年が地域社会に対する意義の変化、現地住民持つチャン暦年の保護に対する態度を考察するために質問を行った。具体的には、以下の5つのインタビューガイドを設定した。

①チャン暦年の儀式や内容などについてどれだけ知っていますか。参加したことはありますか。

A：これは政府の仕事だ、彼らの決まり次第だ。どうでもいいや。時々賑わいを見物に行く。

G：面白いよ、チャン暦年って。内容についてわかるかどうか…さあ…シビの法文誦読などもある。法文の

意義を聞くのか？実はよくわからないが、現場で司会者が儀式の意義を説明するので、わからなくても大丈夫だ。

インタビューの結果から見れば、一部のチャン族人はチャン暦年の儀式や祭礼の内容を詳しく知らず、知ろうとする興味も不足している。「あれは政府や関連人員の仕事だ」と思う人が多いが、チャン暦年への参加意欲はないとは言えない。

②チャン暦年の現状についてどう思いますか。

A：これは宣伝手段だ。歌とか、儀式とか色々やるんだ。昔はこのような形式主義なものがないんだ。

B：楽しいぞ、チャン暦年を過ごしたら、村民間の関係も親しくなる気がする。

E：チャン暦年が面白いんだ。パーティーみたいだ、楽しいね。以前はこのような活動がなかったみたいだ。村で小規模な祭りをを行うだけだった。今の方がずっと豊富になった。

インタビューの結果から見ると、一部の調査対象者はチャン暦年の現状は伝統文化に対する破壊で、儀式の感じがなくなったと答えている。一方で、大部分の調査対象者は今のチャン暦年の形が良いと考えている。その理由を尋ねると、「面白い」、「賑やかだ」、「チャン暦年に参加するのを通じて他の村民との関係が親しくなる」のキーワードが出た。

③観光開発などの保護策がチャン暦年に与える影響についてどう思いますか。

A：観光開発がいいと思う。チャン暦年の時に観光客が多く来た。俺の収入も一番高い時期だ。

C：一番の影響はやはり認知度の上昇だ。以前チャン族といえば、少数民族としか知られていなかったかもしれない。今はチャン族と言えば、少なくともチャン族の刺繍、チャン暦年が知られるようになった。

D：今年はコロナ禍で、観光業は大打撃を受け、観光客も少なくなった。観光客が一度来たら二度と来ないに違いない。しかし今のチャン暦年の演出は全部観光客のために作られたのだ、正直に言うと気持ち悪いと思う。

まとめてみると、大部分の調査対象者は賛成の態度を持っている。ここで見られる3つのキーワードは、経済発展、認知度上昇、誇りである。もちろん、疑問をもつ人もいる。その理由は、観光業の発展も安定しておらず、観光業を発展させるために自分の民族文化を犠牲にするのは適切ではないと考えるためである。

④他のチャン族無形文化遺産に対してどう考えますか。

この部分の回答をまとめてみると、まずはチャン族語について、関係者と非関係者の答えに大きな隔たりがある。また、チャン族の刺繍の伝承と発展に対しては、全ての調査対象者が積極的な評価を与えた。他の無形文化遺産の保護は、形式主義、箱物政治だと評価する調査対象者が多かった。

⑤茂県のチャン暦年に対する保護策や観光開発に対して、何か意見、提案がありますか。

ここで出たキーワードは、「若者の力」、「現地住民の参加、発言権の確保」、「文化活動の形式の増加」、「大学との提携」などである。

7. 考察

(1) 震災復興後チャン暦年の変化についての分析

今石（2014）によると、無形文化遺産は人、モノ、時、場など、様々な要素が有機的に結びつくことで形作られる。そのゆえに、これからの分析はチャン暦年の開催時期と場所の変化、参加人員の変化、儀式の内容の変化の3つの側面に分けて展開したい。

まず、開催時期と場所の変化について検討する。伝統的なチャン暦年の開催時期は毎年の旧暦⁴10月1日で、普通は三日間続く。復興後、チャン暦年を行う時間は三日間から一日半に短縮されて、開催時間も自由に変更できるようになった。時間の随意性によって、チャン暦年の儀式に対する認識が変わり、儀式の権威も弱まった。場所については、伝統的なチャン暦年の儀式は主に2つの場所で行われる。ひとつはチャン族の村の寺で、もうひとつはチャン族の神樹林である。地震によって、茂県の多くの寺や神樹林が破壊された。

震災後の再建において、寺や神樹林は回復しておらず、茂県のチャン暦年の開催場所は古羌城に固定された。前記で述べたように、古羌城は震災後新たに建設された観光スポットである。中には広場、博物館、ホテルやお土産売店などがある。まとめてみると、古羌城には、伝統的なチャン暦年で必要となる物理的な文化空間がなく、巨大な舞台劇場に似ている。

そして、参加者の変化について分析する。元々のチャン暦年において、シビは儀式の靈魂人物であり、主催者の役割を果たした。震災復興後のチャン暦年において、シビの役割は大幅に弱められた。現在のチャン暦年では、シビの役割は主催者よりも、役者の方にもっと似ている。そして、村民の役割も変化してきた。元々のチャン暦年で、住民はシビに率いられて、共に儀式を行う。現在では、住民の一部が政府の要請でチャン暦年の役者となり、他の村民はほとんど観衆となった。前述のように、祭りなどの地域文化活動の過程において、住民相互の連帯感・共同体意識が作り出され、その共同体意識が地域アイデンティティとなる（中川 2012）。したがって、共同体としての活動がなくなってしまうため、民族のアイデンティティが喪失した可能性が考えられるのである。

最後は、儀式の内容の変化を述べる。伝統的なチャン暦は、主にチャン族人民の農耕文化活動と祖先や神霊を祭ることなどを反映している。震災復興後のチャン暦年の場合、祭り儀式が大幅に短縮された後、代わりに歌舞や芸能、共産党の指導を賛美する内容が多く行われるようになった。この部分の変化からみると、現在のチャン暦年の演目には政府が直接あるいは間接的に参与することがわかり、政府はチャン暦年の震災復興に重要な役割を果たしていることが窺える。チャン暦年の宗教の色が大幅に薄められた。

（2）現地住民への考察

現地のチャン族人に対して、チャン暦年の意義は経時的に変化して来た。地震が発生する前に、チャン暦年はチャン族の伝統文化で最も重要な祭りとして、チャン族という民族のグループアイデンティティを構

築、強化する役割を果たしていた。2020年で四川大地震から12年が経過した。経済や社会の発展に伴い、チャン暦年の伝統的な意義（還願、一家団欒）が希薄化するとともに、震災直後に現れた「緊張感を和らげ、地域の繋がりを強化する」という意義も近年では希薄化してきている。反対に、チャン暦年の観光資源としての経済的意義は重要になった。今の茂県の住民から見れば、チャン暦年はチャン暦年のシビと同じように、もともとの宗教的な意義が薄くなった。その代わりに、チャン暦年は一つの文化のシンボル、象徴的なものになっている。チャン暦年の儀式や内容はもう重要ではなく、チャン暦年によってもたらされる経済的利益が重要である。

一方で、多くの先行研究で言及されていないのは、女性がチャン暦年に参加する程度の変化である。宗教や伝統文化に起因する理由で、伝統的なチャン暦年において、特に活動の場合に、参加する人に男性の割合は極めて高く、女性の参加度は相対的に低い。しかし、チャン暦年の活動における宗教の色の弱化とパフォーマンス活動の増加に伴い、チャン族女性の参加度は徐々に高まってきている。これにより、チャン族女性の自分の民族文化に対する共感が高まったことが推測できる。

（3）観光開発がチャン暦年に与える影響

調査の結果から、震災復興によって、観光業は段々現地の経済モデルの重要な一部となった。また、経済の発展に伴い、現地住民の生活水準も上昇した。多くの住民は、観光業の発展によって就業が可能となったことを指摘していた。また、震災後における観光業の発展に伴い、茂県の認知度は上昇し、茂県に来る観光客も増加することで、チャン暦年などのチャン族伝統文化も徐々に知られるようになった。

しかしながら、観光の発展によって、チャン暦年の内容が変貌してきたのも事実である。今石（2018）によると、これまで、民俗芸能などの無形文化遺産への関心は行政や研究者、一部の愛好者に限られたのだが、復興とともに被災地も徐々に有名になり、マスコミや

観光客なども訪れるようになった。それに応じて、芸術、音楽活動やツーリズムなど様々な領域とコラボレーションした新しい活動も誕生する。こうした「外からの力」によって復興を果たし、すっかり変貌してきた無形文化遺産も今や少なくない。調査の結果から、現在、チャン暦年は震災前と比べて、伝統的な犠牲や奉仕などの内容は減少したり、変更されたりしていることが明らかとなった。その代わりに、伝統文化芸術会や千人鍋、キャンプファイヤーなどのイベントは徐々にチャン暦年の重要な活動となった。つまり、チャン暦年の内容は観光客のニーズに合わせるようになってきたのである。

さらに、復興策と経済発展の影響によって、現地住民は徐々に自らの民族文化の経済的な意義を認識し始めた。民族伝統文化が観光客を誘致し、収入を増加させる道具でもあることを意識した。それゆえに、観光客を誘致するためにわざと文化施設を展示することもある。

(4) 政府が主導する復興がチャン暦年に与える影響

まず、政府の援助によって、チャン暦年などの無形文化遺産の保護資金と人材資源が豊富になった。しかし、政府の強い主導はチャン族住民が自文化を保護することに対する意識や興味を希薄化させる結果をもたらしていた。長期にわたって、チャン暦年などの無形文化遺産は地元のチャン族住民により民族の伝統に基づいて自発的に伝承されて来たのである。特に、伝統的なチャン暦年はシビが主催するという形であった。しかし、復興政策の推進に伴い、無形文化遺産の保護における政府の影響力が増大した。調査結果から見ると、全ての復興に関する政策にはチャン族住民の意見や参加がなく、彼らは受動的にチャン暦年の活動に参加している。彼らは自分達の文化を詳しく知らず、しかも知ろうとする興味もない。チャン族住民の主観的能動性は乏しく、チャン族文化の持ち主としての意識が薄くなっている。先述の「外の力」と対応して、「内の力」の欠如が露呈し、チャン族文化保護に

おける主体と客体の位置が反転された。

さらに、政府の介入によって、チャン暦年の内容は大幅に変容した。調査でわかるように、チャン暦年の演目は政府の指示によって変わったところが多い。その指示によって、伝統的な神と祖先に感謝、還願、一家団欒などの要素はしだいに少なくなった。そのかわりに、「観光」、「復興」などの要素がチャン暦年でよくみられるようになった。

8. 終わりに

本論文では、四川大地震後茂県のチャン暦年の実態について調査を行なった。調査結果から見れば、伝統的なチャン暦年と比べて、現在のチャン暦年は祭礼としての意識が希薄化し、観光開発の目的が強調される世俗性が増加した。また地元の政府係員を招待し、政治的なショーになっている可能性がある。地域文化の地域アイデンティティを象徴する意義より、チャン暦年によってもたらされた経済的な価値が現地住民にとって重視された。

震災復興のチャン暦年の場合、政府、観光開発などの「外の力」がより大きな役割を果たした。それに伴い、地域住民が自分の民族文化への保護意識が弱くなった。つまり、復興に伴い、「内の力」が徐々に弱体化しているのである。これが現段階で、持続可能な無形文化遺産保護と復興を実現するために最も深刻な問題点である。

補注

- (1) 羌寨はチャン族村落の居住区である。
- (2) 古羌城は2013年11月に竣工した観光スポットであり、四川省アバチベット自治州茂県鳳儀鎮に位置している。2014年から、茂県のチャン暦年は「古羌城」で開催することになった。
- (3) 全面小康とは、ややゆとりのある生活ができる社会を全面的に完成させることである。中国共産党五中全会での建議案において2020年に「小康社会」の全面的実現を掲げている。
- (4) ハダとは、長方形の絹布で作られたものである。長さは同じではなくて、普通は7メートルから13メートルまでで、3メートルの長さもある。伝統的に、ハダを献上するのは、相手に誠意と尊敬を表現するのである。チャン族、チベット族などの少数民族の文化伝統には、結婚と葬式、友人への挨拶などの場合にハダを捧げる習慣もある。現

代のチャン・チベット族地区において、ハダはすでに敬意を表す吉祥物となる。

- (5) 農家楽とは、中国語でグリーンツーリズム、農家民泊のことを指す。都市から離れた自然豊かな郷村の農家を整備し、宿泊をはじめとする各種アクティビティを楽しむようにした施設である。
- (6) 旧暦は、中国の伝統的な暦法である。

参考文献

日本語

- 1) 今石みぎわ(2018), 「生きた文化財を継承する-無形文化遺産と被災・復興」, 高倉浩樹・山口睦編著『震災後の地域文化と被災者の民俗誌』, 新泉社, pp.38-52.
- 2) 王藝璇(2021), 「五・一二四川大地震後羌(チャン)族無形文化遺産の保護と復興—茂県の羌暦年を例として—」, 大谷順子編著『四川大地震から学ぶ』, 九州大学出版社, pp.185-210.
- 3) 日高真吾(2015), 「生活文化の記憶を取り戻す—文化遺産レスキューの現場から」, 木部暢子編『災害に学ぶ—文化資源の保全と再生』, 勉誠出版, pp.175-200.
- 4) 小谷竜介(2018), 「文化財化する地域文化-大規模災害後の民俗文化財をめぐる対応から」, 高倉浩樹・山口睦編著『震災後の地域文化と被災者の民俗誌』, 新泉社, pp.24-37.
- 5) 清水展(2003), 『噴火のこだま-ピナトゥボ・アエタの被災をめぐる文化・開発・NGO』, 九州大学出版会, pp.1-141.
- 6) 清水展(2011), 「世界の消滅と新生、あるいは災害と先住民の誕生:フィリピン・ピナトゥボ山大噴火がもたらしたアエタの経験から (特集 復興への道) - (世界諸地域の事例からの示唆)」, 『季刊民族学』, Vol.35, No.4, pp.89-94.
- 7) 高倉浩樹(2014), 『無形民俗文化財が被災するということ-東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民族誌』, 新泉社, pp.25-189.
- 8) 高倉浩樹(2018), 「福島県の民俗芸能と減災無形文化遺産-災害復興政策になぜ無形文化財が必要なのか」, 『震災後の地域文化と被災者の民俗誌 (高倉浩樹・山口睦編、新泉社)』, pp.130-146.
- 9) 中川武(2012), 『文化遺産の保全と復興の哲学-自然との創造的関係の再生-』, 早稲田大学出版部, pp.15-36.
- 10) 橋本裕之(2016), 『震災と芸能-地域再生の原動力』, 追手門学院大学出版会, pp.9-97, pp.114-126.
- 11) 松岡正子・李紹明(2010), 『四川省の羌族-汶川大地震を乗

り越えて (1950-2009)』, 風響社, pp.37-165.

英語

- 1) Jigyasu Rohit(2001), Form 'natural' to 'cultural' disaster: consequences of post-earthquake rehabilitation process on cultural heritage in Marathwada region. India, *Bulletin of the New Zealand Society for Earthquake Engineering*, Vol.34, No.3, pp.119-127.
- 2) Bourdieu Pierre(1993), *The Field of Cultural Production*, Polity Press, p.167.

中国語

- 1) 李大舟・張世均, 2009, <“汶川大地震”对民族文化保護的影响-以地震中的羌族文化为例>, 《重慶教育学院学報》 2009年第4期, pp.12-22.
- 2) 李紹明, 2014, <藏彝走廊的回顧与前瞻>, 《藏彝走廊-文化多样性, 族際互动与發展》民族出版社, pp.526-534.
- 3) 趙曦, 2013, <災難人類学視野下常態文化的断裂与非常態再建応用取向>, 《地方文化研究》 2013年第4期, pp.85-90.